

2014年サバ類

単位：数量，1000トン、価格，円/kg

年	数										量				消費支出 生(万円)
	漁獲	産地	輸入	輸出		東 京				在 庫	加 工 品				
				生	冷	生	冷	塩干	塩蔵		缶	干	蔵	節	
25	385.5	321.7	55.5	113.2	3.1	11.2	3.3	2.0	0.3	55.2	33.4	19.2	43.5	13.6	1,184
26	501.9	434.1	61.4	105.9	3.5	11.1	2.4	1.7	0.3	76.5	35.4				1,148
%	130	135	111	94	113	99	73	84	110	139	106	0	0	0	97

年	価 格									消費支出 生(円)
	産地	輸入	輸 出		東 京					
			生	冷	生	冷	塩干	塩蔵		
25	108	227	106	463	345	469	533	494	1,059	
26	91	236	109	474	387	554	608	634	1,082	
%	84	104	103	102	112	118	114	128	102	

漁獲と資源

26年のサバ類（マサバとゴマサバ）の漁獲量は、50万トンを超え前年（38.9万トン）をかなり上回り、近年の平均（50万トン）に久し振りに達したものとみられる。

マサバ太平洋系群の資源量は、1970年代には300万トン以上の高い水準であったが、1980～90年代に減少し、2001年には15万トンまで落ち込んだ。その後、2004年級群などの比較的高い加入とまき網操業管理による漁獲圧低下により増加し、2012年は103万トン、2013年は2013年級群の高い加入によって136万トンに増加した。加入量水準の高い2009年級が主体となり2012年の親魚量は47.5万トンに増加したが、これに続く2010年、2011年の加入量水準が高くなかったため、2013年の親魚量は前年より減少して41.3万トンとされている。親魚量はB1 limit（45万トン）を下回ったが、未成魚の資源量が増加しており、現在の漁獲圧でも2015年には45万トンを上回ると見込まれる、とされている。

マサバ対馬暖流系群の資源量は、1970・80年代は高い水準で安定していた。1987～1990年に減少した後、増加傾向を示し、1993～1996年は高い水準に達した。1997年以降、資源量は急減し2000～2007年は低い水準で推移したが、2008年に増加した。2009年に減少し2012年まで横ばいであったが、2013年に急減し43万トンとなった。加入量は近年では2008年に高い値となったが、その後は低い値で推移している。親魚量は1996年を近年の頂点に2003年まで減少したが、2009年に増加した。その後は低い値で推移している。再生産成功率は1991年以降、比較的高い値を示していて、2004年以降は変動幅が大きい、とされている。

近年安定している太平洋系群のゴマサバの資源量は、1995年以降ではおおむね安定した加入の継続と1996、2004年の高い加入量によって30万トン前後から2004年以降50～60万トンに増加し、さらに2009年級群の高い加入によって2009年以降70万トン以上に達する高い水準にある。2013年は78.5万トンであった。親魚量はB1 limitを大きく上回って推移しており、2013年は30.9万トンであった。

また東シナ海系群のゴマサバの資源量は1992～2013年に比較的安定して10万～20万トン程度で推移している。2000年以降では、資源量は2005年に高い値を示したが、2008年にかけて減少傾向を示した。その後は緩やかな増加傾向を示し、2013年の資源量は13.4万トンであった。加入量は2004年にやや高い値となったが、2005～2008年は減少傾向を示し、2009年以降

は安定した値で推移している。2004年の高い加入量のため、親魚量は2005年に増加した。その後は減少傾向を示していたが、2010年以降は概ね増加傾向を示している。再生産成功率は、1993、2004年に高い値を示した他は、比較的安定している、といわれている。

産地水揚量と価格（継続漁港）

26年の産地水揚量は、43.4万トンで特に常磐・犬吠埼海域と山陰海域での漁の伸びを反映し、前年（32.2万トン）をかなり上回った。

価格は、生産の増加を反映し91円で前年（108円）を下回った。

海域別漁獲量

本年の海域別漁獲量は、太平洋側の道東海域が引続き漁獲を伸ばし、常磐、山陰も好調であった結果、前年を上回った。道東海域では、巻き網による漁獲(23,125トン)がみられ、釧路・十勝（47%と大幅に増えた）にも水揚げされたが、処理能力の問題もあって、本年も八戸港（10,778トン）へかなりの量（47%）が水揚げされた。

海域別水揚量

海 域	25年	26年	対 比 (%)
道 東	2.7	9.3	341
三 陸	72.3	98.9	137
常 磐	79.4	164.3	207
東 海	58.6	44.5	76
薩 南	15.2	16.1	105
東シ海	68.8	61.7	90
山 陰	10.3	24.8	240
その他	13.3	15.0	113
合 計	320.5	434.6	136

三陸（単位：1000トン）

月	25年	26年
1	0.6	9.1
2	0.7	4.6
3	0.2	0.9
4	0.0	0.2
5	0.3	2.5
6	0.5	2.5
7	4.9	7.4
8	9.1	7.1
9	22.3	20.4
10	23.8	17.6
11	4.9	16.9
12	5.1	9.9
計	72.3	98.9

MAX：H53 69万トン

常磐（単位：1000トン）

月	25年	26年
1	7.8	33.7
2	9.3	21.9
3	5.4	12.3
4	4.8	12.0
5	2.5	2.6
6	7.1	16.2
7	2.5	3.4
8	0.0	0.3
9	0.0	0.0
10	10.8	11.5
11	14.4	20.2
12	14.8	30.3
計	79.4	164.3

MAX：S59 30.4万トン

東シナ海（単位：1000トン）

月	25年	26年
1	14.6	7.3
2	5.7	4.1
3	3.4	2.1
4	2.6	1.8
5	3.8	3.2
6	3.6	3.1
7	1.6	1.6
8	5.1	2.3
9	3.4	3.4
10	5.3	9.8
11	7.6	8.1
12	12.0	15.0
計	68.8	61.7

MAX：H 8 22.2万トン

山陰（単位：1000トン）

月	25年	26年
1	3.9	4.4
2	1.3	4.1
3	0.5	5.8
4	0.4	0.3
5	0.1	0.2
6	0.1	0.1
7	0.1	0.1
8	1.0	0.1
9	0.8	0.3
10	0.1	0.2
11	0.1	2.3
12	1.9	7.0
計	10.3	24.8

MAX：H 6 14.1万トン

道 東

本年の道東の漁は、8月31日から始まり10月12日まで続いた。漁期前半は、1,2歳魚主体で。漁期後半に大型魚も獲れだしたが、昨年に比べ総じて魚体は小さかった。そうしたこともあって釧路に、水揚げされたサバの6割はミールに向けられた。

三 陸

本年の三陸の漁は、北上期は昨年よりはまとまった漁獲で、南下期も10、11月にまとまったことで、また9月主体に道東沖からの搬入が10,800トン（前年17,000トン）程度あり、その結果、昨年をやや上回る漁獲となった。

本然も7月中旬に八戸近海でサバの初漁があり、昨年同様12月まで漁獲がみられた。本年も初漁期から10月上旬頃までは昨年同様ゴマサバの混じりがみられた。

また本年も7月下旬にまき網によるスルメイカの漁獲が始まり、低調であったこともあり10月まで操業し、漁獲量は昨年の約4,745トンをやや下廻る約4,470トンで低調であった。

魚体は、1歳魚（2013年級群）主体に、2歳魚（2012年級群）、当歳魚（2014年級群）で大型サイズは少なかったが、8～9月にかけては一時3歳魚（2011年級群）も漁獲された。

また、本年のブリ（イナダ、ワカシ）の漁獲は、10月にピークがみられた。水揚量は、昨年を下回り、近年ではやや低い水準であった。

常 磐

この海域は、未だ放射能漏れの影響で操業を回避した海域が含まれており、本年も操業がかなり制約された。本年の越冬サバ漁は低調に推移し、79.9千トンの漁獲で前年（27.3千トン）を大きく上回った。

また、春（5～7月期）の北上期の漁獲はで22.2千トンと前年（12.1千トン）を大きく上回った。南下群の漁獲も62千トンで前年（40千トン）を大きく上回った。

なお本年も北部太平洋海域では資源回復計画に基づく休漁も多かったが、今期は周年好調な漁であった。

なお、本年のブリ類（イナダ、ワカシ）の漁獲は、年明け後の2.3月と11、12月に集中してみられたが、近年では最も多い水揚げであった前年に比べるとかなり減少した。

魚体は、越冬群はほぼ2歳魚（2012年級群）主体に3歳魚（2011年級群）以上の混じりであったが、北上期には2歳魚（2012年級群）、1歳魚（2013年級群）主体に、3歳魚（2011年級群）以上混じり、南下期は、2歳魚（2012年級群）主体に3歳魚（2011年級群）、1歳魚（2013年級群）、後半には、大半が1歳魚、2歳魚主体に3歳魚、当歳魚混じりの組成であった。本年も時期によってはゴマサバの混獲が目立った。

東 海

伊豆諸島周辺を主漁場として、主に産卵群を対象とするサバタモ抄い漁業は、昭和54（1979）年の17.7万トン进行ピークに減少しており、近年においても概ね1万トン以下の低調な漁獲が続いている。また操業隻数も往時に比べ大幅に減少しており200隻を割ったこともあったが、本年はやや増加の236隻であった。なお隻数の減少もあってか、1隻当たりの水揚げは、特にゴマサバは昨年データを取ってから最高であったが、本年は大きく減少した。なお本年の総漁獲量は3,192トン（前年：3,733トン）で前年を下回った。

26年の漁獲量は、マサバが2,781トンで前年（2,325トン）を上回り、ゴマサバも411トン（前年：1,408トン）で大きく減少した。何れにしても近年は、マサバがゴマサバを凌駕している。

東 シ ナ 海

26年前半の年明け後の冬漁は昨年、一昨年より低調であった。夏場の閑漁期の漁も前年を下回った。9月以降本番に当たる冬の盛漁期によりやうく数量的にまとまり、各月とも前年を上回り、水揚げも増加した。しかし、上半期の不振がたたりに、結果的にはもん年も前年を下回る水揚げに終わった。

サイズは、ローソクサバ主体の漁況が長く続き、1、2歳魚主体で3歳魚以上の出現は少なかった。また本年は済州島漁場は形成されなかった。

山 陰

この海域で漁況は、年明け後の漁が前年を上回ったが、閑漁期の夏場の漁は前年並みの低調な漁であった。しかも秋以降の漁は九州同様、前年を上回る漁だったことで、その結果水揚げは前年に比べ倍増した。

魚体は、2013年級群が主体であった。

輸 入

本年の輸入量は、6.1万トンで、前年（5.5万トン）を上回った。本年のノルウェーからの搬入は、現地価格の下落もあったものの円安による搬入コスト高もあって下げには繋がらなかった。本年も搬入のピークは昨年同様12月に集中した。

主要な輸入国は本年も依然ノルウェーのシェアが92%と高く、昨年並み（92%）であった。また、それ以外の国では、イギリス2,248トン、アイルランド1,269トン（前年：641トン）、アイスランド721トン（前年：1,469トン）、中国が427トン（前年：1,715トン）であったが、イギリスの伸びが目立った。

本年のノルウェーからの輸入原料は600gサイズ以下が99%（前年：98%）主体に600gUPが1%（前年：2%）で、シェアでは600gUPが本年も更に減少しており、殆ど皆無状態といような状態である。また600gUPサイズでは日本とオランダ等諸外国との競合関係があるが、数量が少なく高値が続いていることで日本が1/4のシェアを占め、ロシア等の諸外国は殆ど買っていない

い。本年のノルウェーサバを巡っては、漁獲枠の増加もあり、各国とも増加しているが、とりわけナイジェリア等、アフリカ、中近東諸国の伸びが目立っている。

価格は、236円で前年（227円）を現地価格は下げたものの円安もありやや上回った。

また、サバは中国（約6割）、タイ（約3割）等海外加工が依然活発にみられ、製品輸入も多い。本年は、13,669トンで前年（12,450トン）を引き続きやや上回った。

輸 出

本年の輸出量は、国内生産の増加と円安の割には伸びず、再度10.6万トンで前年（11.3万トン）をやや下回った。

本年は、タイが再度トップ（2.6万トン）に立ち、続いてエジプト、ベトナム、フィリピン、インドネシア、ガーナ、マレーシア、中国、モザンビーク、ケニアの順に変わったが、依然東南アジア諸国、アフリカへの伸びが大きい事実は変わらない。また、缶詰輸出は3.5千トンと再度前年（3.1千トン）を上回った。

在 庫 量

月平均在庫量は、7.7万トンと前年（5.5万トン）を上回った。

これは、国内生産量並びに輸入量の増加、輸出量の減少を大きく反映している。

消費地入荷量と価格

26年の東京消費地入荷量は、生鮮が1.1万トンと前年（1.1万トン）並みであった。

また、冷凍は2.4千トン（前年：3.3千トン）、塩干1.7千トン（前年：2千トン）、塩蔵0.3千トン（前年：0.3千トン）であったが、本年は国内生産が増加したものの、道東物のサイズが前年ほど大きくなかったこともあり消費地での鮮魚取扱は伸びなかった。塩蔵サバだけがやや伸びたが、冷凍、塩干品は前年を下回った。冷凍品はノルウェーサバの600gアップサイズ（従来からこのサイズの取扱いが多かった）の国内搬入の減少により、消費地での取扱は減少傾向にある。

価格は、生鮮387円（前年：345円）、冷凍554円（前年：469円）、塩干608円（前年：533円）、塩蔵634円（前年：494円）であったが、何れも上昇傾向が顕著であった。ノルウェー原料の高騰や端売りサイズ問題、入荷の減少に左右された結果となった。

また、本年も消費地市場、末端のスーパー・量販店では、時期によってはゴマサバが恒常的に販売されるようになり、鮮魚販売や、缶詰を含む加工品にもかなり利用・定着している。なお消費支出をみると数量がやや減少、金額がほぼ前年並みであった。